厨子にみられる禅宗様三手先組物の形態とその変遷について

—中世から近世初頭の遺構を中心として—

STUDY ON THE FORM OF ZEN-STYLE TRIPLE-BRACKETS
ON ZUSHI ARCHITECTURE—Centering around the remaining examples in from the middle ages
to the beginning of the early modern age—

城光寺 文章*, 櫻井 敏雄**

Fumiaki JYOKOHJI and Toshio SAKURAI

In the Middle age, the Zen-style triple-brackets is generally used in Zen-style temple's architecture. In the Esoteric Buddhist Temple Architecture, the Zen-style triple-brackets is not found out in Main Hall, but it found out in Zushi Architecture in 14th century. The triple-brackets on Zushi Architecture seems to grow into the peculiar shape in modern age. Zen-style brackets have two different types in length of bracket arms. Pilling of bracket arms and tie bracket arms are shown the difference in the age.

Keywords : *Triple-brackets, Zen-style, Zushi architecture*

三手先組物、禅宗様、厨子

1. はじめに

上代の寺院では伽藍の中心となる主要な建築の組物に三手先を採用してきた経緯がある。その後、三手先組物は伝統的な様式を遵守する塔・金堂や楼門・二重門において採用されているものの、中世の密教本堂は上代寺院の金堂とは異なり、その成立の過程を山岳伽藍にもつことから、本堂の側廻りの組物を三手先とする遺構はみられず、その採用は近世に入ってからのこととなる。また、この密教寺院の本堂では外陣の成立とともに、堂内の意匠の中心はこれまでの内陣から外陣の空間に移行し、内陣に安置される本尊を祀る厨子に内々陣としての価値付けが与えられて、仏堂の側廻りや外陣廻りより手先数を多くした組物が採用されるようになり、内陣の中心的な施設となる^{※1)}。

中世の仏堂で三手先組物を採用するのは禅宗寺院の仏殿等があり、三手先組物は禅宗様の採用の過程で新たな展開をしたものと考えられる。禅宗様については関口欣也博士の詳細な研究があり、特に禅宗様組物の立面構成として、出組以上で横にも二手の拵がりを持つことを指摘され、この大斗上肘木にのる長手の肘木の長さの相互の

関係について4種に分類されている。また、その肘木、斗、肘木曲線などの分析や特徴、分布する地域や特殊例などについて言及され、組物の断面においても、手先や尾垂木数、内部尾垂木の手法について論及されている^{※2)}。

本論では、禅宗様を採用する過程で中世に発達し大きく展開する厨子の三手先組物について、特にその断面の部材の構成に着目して検討を加える。厨子の組物は仏堂などのものとは異なり、大きく荷重を支えるという役目からは解放されていて、その組物の形式のもつ意匠の中心は実在の建築のものを越えるものもあると考えられ、三手先組物の断面の形式を編年することで、中世における厨子を中心とした禅宗様三手先組物の変遷と多様な構成をもつ近世厨子の組物に至る過程を考察できるものとする。厨子の建築の研究についてはこれまでに伊藤延男博士の研究があり、最近では総括的に厨子を扱ったものとして大野敏氏の一連の研究がある^{※3)}。

本論で使用する図面は付記したものを除き修理工事報告書や文化庁の図面を使用し、断面図や立面図のなかの組物部分を抜き出して判別し易いように断面部材にグレートーンを施し、写真は筆

* 近畿大学理工学部建築学科 助手・工修

** 近畿大学理工学部建築学科 教授・工博

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Engineering, Kinki Univ., M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Engineering, Kinki Univ., Dr. Eng.

者が調査時に撮影したものである。

2. 厨子における禅宗様三手先組物の構成

厨子の組物が採用している様式には和様のものと室町時代以降に主流となる禅宗様のものが主で、他に大仏様の影響が残る地域にはその折衷様と考えられる遺構もみられる。ここでは重要文化財及びその附けたり指定となっている遺構を中心とし、指定が未だ少ない近世については管見の及んだ遺構を加えて考察するが、これらの資料については重要文化財の指定遺構も含めて現地調査を行いその組物の構成が当初か否かの確認をおこなったものである。春日厨子を除く三斗以上の組物をもつ鎌倉時代から桃山時代までの厨子遺構の数は約130棟を数えることができる。この数字が実態を示すかは別として時代別に組物の種類をみると、鎌倉時代では出組・出三斗を合わせて8棟であるのに対し、三手先以上の組物とする遺構は2棟を数えるに留まる。しかし、南北朝期に入るとこの出組とする遺構7棟に対して三手先遺構は6棟を数え、これが室町時代中期以降では三手先以上とする遺構が他の組物形式を上まわり、桃山時代では遺構全体の半数を占めていることが確認でき、室町時代後期には禅宗様組物を採用した遺構が主流となっているものと考えられる²⁴⁾。

この禅宗様の組物は和様のものと比べて組物の立面構成において著しい特色のあることが既に明かにされている。その特色の一つは詰組とすること、そして一般的には2種の長さの肘木を順に積み重ねて左右への拡がりを持たせる手法があげられ、これは厨子においても禅宗様の特徴的な外観を構成する上で効果が大であったと考えられる。本論ではこの2種の長さの肘木を積み重ねる手法に着目し、その手先の位置とこの肘木上に置く通肘木の本数や通肘木間を塞ぐ板支輪の形態などに着目して比較検討し、分類をおこなった。禅宗様の特色をもつ組物の断面の部材構成を以下に示すように分類し、その変遷過程について考察する。

a) Z1群 三手先組物の壁付きの通りを含む二手目までの各手先上に各々禅宗様の特色となる長さの異なる2種の肘木を積み重ね、その上に通肘木を一段通す形式である。各肘木や通肘木が階段状に手先の出とともに上方へ昇る構成となり、各手先最上段の通肘木間に張られる小天井が全て板支輪となり、短・長肘木の組合せによる上方への拡がり感と各手先位置での奥行が一定となる斜めに昇る板支輪とが相俟って、迫り上がる意匠に適っているものと考えられる。

図1 宝城坊旧本堂厨子組物立面・断面図
『神奈川県文化財図説』所載図

図2 正福寺地藏堂主屋組物断面図

表1は厨子遺構を建立年代順にその断面形式で分類したもので、この断面構成をもつZ1群の遺構には宝城坊旧本堂厨子、大法寺観音堂厨子²⁵⁾があり、以下室町時代の中期から後期に亘って広く分布していることが見て取れる。この形式は厨子に限られたものではなく、禅宗様の仏堂等とも共通している。禅宗様組物で尾垂木尻架構をもつ正福寺地藏堂、円覚寺舍利殿、定光寺本堂、西願寺阿弥陀堂、円覚寺古図仏殿²⁶⁾など、禅宗様仏殿遺構の中でもその主要なものがこの形式に属していて、この他安楽寺八角三重塔初重組物(室・初期、国宝、長野県)にもみられ、これは厨子にとどまる形式ではなく禅宗様三手先組物の基本的な形式であると考えられる。この尾垂木尻架構をもつ組物については、壁付き通りでの通肘木の積み重ねは単に組物のその外観からの意匠のみではなく、内部へ引き込む尾垂木尻の支持とも関係していて、尾垂木尻架構を持たない厨子とは直接には比較できず、支輪板の入れ方など、組物の外観としての比較に留まる。

この断面構成をとる近世の厨子遺構のなかでは宝塔寺本堂日蓮厨子²⁷⁾、円教寺奥の院開山堂厨子を上質なものとしてあげることができる。五手先とする円教寺では手先上で同一の構成を機械的に積み重ねていて、こうした近世の手先数を多くした構成に適った手法となっていることも注目される。

b) Z2群 壁付き位置の通肘木が1段増して2段となり、Z1群で2段にわたり入っていた板支輪が二手目の1段のみとなり、一手目と壁付き通りの通肘木は同高となり、この通肘木間には斜めの板支輪ではなく、水平な小天井板を張る形式である。

厨子では月輪寺薬師堂厨子が早い例と目され、宝珠院観音堂厨子、栄福寺薬師堂厨子など室町時代後期に入ってから遺構にみら

図3 大法寺観音堂厨子組物

図4 宝塔寺本堂日蓮厨子組物

図5 月輪寺薬師堂厨子組物
(報告書の図をトレースしたもの)

図6 笠森寺観音堂厨子組物

図7 妙成寺祖師堂厨子組物立面・断面図

図8 西山本門寺本堂
厨子組物

図9 南真経寺本堂厨子組物

れている。また、禅宗様仏殿では功山寺仏殿、少し年代が降って不動院金堂があり、他に小建築として厨子と同様と考えられる園城寺一切経堂内にある経蔵⁸⁾も同様の形式で、いずれも尾垂木尻架構をもつ例で直接に比較できないとしても、功山寺を除くと室町時代後期にみられていて注目され、地域的にも千葉県下および広島・山口県と地域的にも纏まりがあるが、現段階ではこの地域性については明確にしない。

この形式は室町時代後期にとどまらず近世に入っても多くみられ、表1に示すように厨子の遺構では笠森寺観音堂厨子²⁹⁾、願興寺本堂厨子、妙成寺祖師堂厨子、江戸時代に入り西山本門寺本堂厨子、南真経寺本堂厨子があり、南真経寺では四手先であるために二・三手先に板支輪を嵌めている。

また、近世ではこの組物形式をとる遺構は禅宗様仏殿や厨子遺構に限らず広く分布していることが確認され、知恩院三門〔江・

図10 功山寺仏殿主屋組物断面図

図11 不動院金堂主屋組物

図12 園城寺一切経堂
経蔵組物

元和7年(1621)、国宝、京都府〕他、近世の代表的な遺構にも採用されていることは特に注目される点である。

c) Z3群 これはZ2群の形式を更に発展させたものと考えられ、二手目の通肘木と同じ高さまで一手目及び壁付き通りの通肘木を積み上げ、各手先間の軒小天井は同高・水平となる構成で、一手目では中段にも通肘木が通ることとなり、手先途中での板支輪はもはや付かず、壁付きの琵琶板や上方の通肘木までみせる奥行の深い構成となる。

表1によって遺構の分布が明らかのように、厨子では定光寺本堂宮殿²¹⁰⁾が初見となり、他に円覚寺薬師堂厨子があり、桃山時代に入って善正寺本堂秀次厨子²¹¹⁾、陸奥国分寺薬師堂厨子にみられる。禅宗様仏殿の遺構では厨子の遺構よりも時代が遡り、永保寺開山堂がある。この永保寺では壁付き通りの通肘木の積み上げは別にしても、外部からみえる肘木2種と通肘木の積み重ねについては同様の構成であり、その他近世の霊廟遺構である輪王寺大猷院霊廟本殿にもこの組物形式がみられる。

これらのうち、円覚寺薬師堂厨子および善正寺本堂秀次厨子では肘木が4種または3種類の長さをもつ組物で、定光寺本堂宮殿他とはその構成が異なる。

まず、初見となる定光寺本堂宮殿は平面規模も柱間を2.31尺にとる規模の小さい遺構で、壁付き通りの通肘木は琵琶板からの造り出しとなり、規模が小さいことやこの壁付き通りの積み上げが多い遺構にはこうした構法が見られるのは肯ける。陸奥国分寺薬師堂厨子では扉両脇の脇羽目や飛貫・頭貫間の壁面一面に彫刻が

嵌め込まれていて、この彫刻が組物の琵琶板面をも埋め尽くして時代の好み反映されており、通肘木間に張る小天井も小組格子としている。近世の霊廟遺構である輪王寺大猷院霊廟大殿にもこの同じ形式の組物がみられ、少しの隙間も残さないほどの詰組となっている。

円覚寺薬師堂厨子は4種の異なる長さをもつ肘木を4段に積み上げ、さらに通肘木を扇垂木の下端まで積み重ね、壁付き通りでは肘木と通肘木は合計7段となり、4種の長さをもつ肘木が順に積み上がる外観は左右の拡がりが大きく特異な組物としての印象が強い。

善正寺本堂秀次厨子は桁下実肘木の高さにまで各手先を積み上げるなかで、壁付き及び一手目には3種の長さの異なる肘木を順に積み上げ、二手目ではそれに合わせて肘木2種を積み重ね、中段の通肘木を廃して全て肘木の積み重ねに徹した点が最も大きな特色

図13 定光寺本堂厨子組物立面・断面図

図14 陸奥国分寺薬師堂厨子組物

図15 円覚寺薬師堂厨子組物

図16 善正寺本堂秀次厨子組物正面及び側面

としてあげられ、組物全体としては大斗から上方への拡がりとは正面からみたときの奥行き深さには特に注目され、立体感のある組物が演出されている。壁付きの通肘木を減らし、全体的にみて斗の成を高くして上方への拡がりを強調し、手先では最上段以外には通肘木を入れずに各手先の前後関係を際立たせ、琵琶板と対比させて立体感・奥行感を出して、禅宗様の組物としてかつ詰組とするものとして意匠的に一つの頂点を極めており、円覚寺薬師堂厨子と同様、規模の大きい仏堂等の建築においてみられるのではなく、厨子などの小建築特有の組物形式と考えられる。

このZ3形式の組物をもつ遺構は、Z2形式よりも遺構の数は少ないように考えられる。また、定光寺本堂厨子・陸奥国分寺薬師堂厨子では肘木は2種のみであり、これらは一問厨子で中備の組物を2具3分割として密に配した詰組ではなく、むしろ組物間の軒裏への視線を意識したことも考えられる。ちなみに陸奥国分寺では通肘木間に小組に組んだ格子を嵌め込んでいる。

d) 変則的な構成をもつ組物について

これまでみてきた禅宗様の三手先組物は、その特徴とされる長さの異なる2種の肘木の積み重ねがあり、これを丸桁を受ける三手目を除く、壁付きから二手先までの各手先上に置く形式であった。しかしここに、三手目と同様に二手目にもこの長さの異なる2種の肘木の積み重ねを置かない形式がみられる。上・下重の尾垂木によって持ち出される二手先、三手先目には三斗の肘木を置くのみの形式となり、三手先目の三斗と実肘木の背後には板支輪が付く。

図17 永保寺開山堂主屋組物断面図

図18 金剛峯寺徳川家霊台霊屋組物立面・断面図

これには常福院薬師堂厨子、安楽寺本堂厨子、宝塔寺本堂日像厨子、楊谷寺阿弥陀堂厨子、伊達政宗霊廟瑞宝殿厨子、善峰寺本堂厨子の遺構がみられる。また、厨子以外でもこの形式は大徳寺山門〔桃・天正17年（1589）、重文、京都府〕など近世の大徳寺や妙心寺の伽藍の中にもみられていて注目される。

常福院薬師堂では側廻りの組物は内外ともに出組とし、厨子は本格的な三手先としている。また、室内では肘木先端を木鼻状とした絵様繰形付肘木としており、これは厨子の組物にも用いられ、統一した意匠がみられている。厨子の組物では一手目および壁付き位置での長さの異なる肘木の積み重ねは絵様繰形付肘木の採用により、壁付き通りに残るのみとなっている。宝塔寺では三手目には秤肘木を置かず、手先上の方斗を置いて直接桁を支持する阿麻組や腰組にみられる形式で、組物としては殆ど例をみない。

また、肘木を積み重ねる手先が更に減り、一手目のみとする形式がみられる。西明寺本堂厨子（枋木）、中山寺本堂厨子、長勝寺三尊仏厨子堂^{註12)}などである。中山寺は四手先で、三手目には支輪を、四手目には菱格子支輪付きとする。肘木の横への拡がり、2本の尾垂木も禅宗様とする反面、支輪を入れ本墓股を飾り、軒は平行垂木とするなど和様の形式も混在している。この点においては、西明寺も同様で中備に組物と捨斗をいれるなど完全な詰組とはなっていない点では共通している。上記の2遺構と比べると長勝寺三尊仏厨子堂の禅宗様色は濃厚なものであるものの、組物間の琵琶板は浮彫り彫刻で埋められていて、この形式の選択は時代の流行に沿い、彫刻を嵌めることと強く関連しているものと推測され、やはりこうした意匠は和様を基本としているものと考えられる。

厨子以外でも西国札所寺院の粉河寺本堂〔江・享保5年（1721）、

図19 常福院薬師堂厨子組物立面・断面図

図20 宝塔寺本堂
日像厨子組物

図21 長勝寺三尊仏厨子堂組物

図22 中山寺本堂厨子組物

図23 法用寺本堂厨子組物

果指定、和歌山県〕他でこの組物形式がみられ、大規模な近世の寺院仏堂で和様を主体としているが禅宗様を取り入れ、詰組とする組物には濃厚な禅宗様三手先を用いる。

この群には建立年代が厨子遺構のなかで最も古い法用寺本堂厨子が含まれる。四手先とし、一手先目では三斗を置かない点は和様の組物であるが、しかし、肘木や尾垂木の形状、二種の肘木を積み重ねるなど禅宗様の手法も受容している。肘木の長さは三斗と長手の肘木上にのる五斗の斗の間隔は等間隔に配置されていて、まだ和様の強さが感じられるもので、四手先のうち二手目までの和様の断面構成に三・四手先の肘木を積み上げ板支輪を配する禅宗様の組物を付加したと理解される。

3. まとめ

厨子の様式的な特質は本堂や本殿のものと同じものであるが、中世以降の厨子に好んで採用された禅宗様三手先組物に着目しその断面形態を分類・編年すると、以下のように大きく異なる点がみられた。

禅宗様の三手先組物は三手目を除き、壁付き通りから二手目までの各手先上に禅宗様の特色となる2種の長さの肘木を積み重ねて横に拡がりをもたせる手法があり、この2段に重ねる肘木上に通す通肘木とその手先間に納められる板支輪の入り方によって大きく3種の形式（Z1～Z3群）の存在が確認できた。また、これら禅宗様が濃厚と考えられる形式の他に、この2種の肘木の積み重ねを三手目と同様に二手目にも置かない変則的な形式がみられ、この中には和様の影響が大きいと考えられる遺構が確認される。以下、明確となった点を項目順に示す。

a) (Z1群) 壁付き通りから二手目までの各手先上に長さの異なる肘木を2段に積んで通肘木を置き、この通肘木間に板支輪が2段に入る形式で、肘木2段と通肘木1段を規則的に手先上に積み上げ、手先の出に伴い1段ずつ迫り上がる構成となる。禅宗様を採用した厨子としては初期の例となる宝城坊旧本堂厨子があり、大法寺観音堂厨子など室町時代の中期から後期にかけても広く遺構が分布していることが確認された。

禅宗様の主な仏殿では堂内の化粧屋根裏天井を支持する尾垂木尻架構をもち、この組物の壁付き通りでは通肘木が何段にも積み重ねられている。この尾垂木尻架構をもつ組物と構造的制約からは解き放たれている厨子組物とを直接に比較はできないが、外観としてみえる手先上の構成や板支輪の付け方については共通しているものと考えられ、この中世の禅宗様仏殿遺構の多くがこの形式に当て

はまることより、中世においては基本的な形式であったことが認められる。

b) (Z2群) 壁付き位置で通肘木を二段として組物の軸部を固め、板支輪は一・二手目間の一段のみとなる形式で、月輪寺薬師堂厨子が遺構の上では早い例となり、室町後期から近世に至ってみられる。禅宗様仏殿においては厨子より時代が遡る功山寺仏殿があり、他不動院金堂、園城寺一切経蔵でみられる。功山寺仏殿を除くと、厨子・禅宗様仏殿遺構とも室町時代後期から近世にわたりみられて、室町時代を通して中心と考えられたZ1群と変わらない遺構数である。

c) (Z3群) 桁下の高さまで各手先の通肘木を積み上げ、通肘木間の小天井が同高・水平となる形式である。遺構には室町後期の定光寺本堂宮殿、近世に入り陸奥国分寺薬師堂厨子があり、禅宗様仏殿遺構では永保寺開山堂でみられ、近世でも本格的な尾垂木尻架構をもつ輪王寺大猷院霊廟本殿がある。この形式では壁付き通りだけではなく、一手目でも通肘木を2段に重ねる構成とする。定光寺本堂、陸奥国分寺薬師堂の各厨子では詰組とする具数がその時代のなかでは少なく、詰組としては密な配置とはなっていない遺構であった。

また、この群には2種以上の肘木を積み重ね、上方への拡がり感を更に強調した例がみられた。3種の肘木を積み上げる善正寺本堂秀次厨子、4種の肘木を積み重ねる円覚寺薬師堂厨子があり、円覚寺では軒小天井を張らずに垂木下端まで通肘木を積み上げている。上方への拡がり感と奥行きのある深い立体感のある組物として注目され、厨子ならではの手法と考えられる。

d) これまでみてきた三手先の組物は、三手先のうち二手目までの各手先上に2種の肘木を重ねる禅宗様の濃厚な組物であったが、別に壁付きおよび一手目にのみ2種の肘木の積み重ねを置く変則的な形式がみられた。それは、特異な形式を持つ法用寺本堂厨子を別にすると、常福院薬師堂厨子、安楽寺本堂厨子、宝塔寺本堂日像厨子、楊谷寺阿弥陀堂厨子等に代表される形式と、西明寺本堂厨子、中山寺本堂厨子、長勝寺三尊仏厨子堂他があり、大きく二つの形式に分けられる。

前者は詰組で、扇垂木とするなど禅宗様としての特色を十分に備えるものである。後者は壁付き通りにも2種の長さをもつ肘木の積み重ねはなく、長手の肘木は通肘木に置き換えられている点で前者と異なる。後者の例となる西明寺では正面柱間1間としては広めで、中備として三つ割りとするように組物を配し、その組物間には通肘木間に捨斗をいれている。長勝寺三尊仏厨子堂では組物間の琵琶板に浮彫り彫刻がはめ込まれていて、こうした彫刻の使用は和様の要素が混じる折衷様式の遺構にみられている。

以上のように、禅宗様の三手先組物について、その断面の構成に着目し、中世において本来の禅宗様仏殿以外で積極的に採用された厨子の三手先組物について考察を加えた。禅宗様三手先組物はその断面形態が多様であることを指摘するとともに、その断面構成について編年的考察を加え、近世においては厨子ならではの形式と考えられる点についても指摘しえた。

註

- 註1) 関口 欣也：『日本建築基礎資料集成 7 仏堂Ⅳ』（中央公論美術出版、昭和50年）
概説及び鶴林寺本堂の項で、内陣・厨子・外陣の意匠の関係について指摘されている。
- 註2) 関口 欣也：中世禅宗様仏堂の斗・（1）、日本建築学会論文報告集、第128号、46～53頁、昭和41年10月
- 註3) 大野 敏：中世厨子の形式分類について、日本建築学会論文報告集、第505号、191～198頁、1998年3月。
大野 敏：宮殿系厨子における新様式の受容に関する一考察—会津法用寺宮殿の建築様式について—、建築史の空間—関口欣也先生退官記念論文集—、155～177頁、平成11年1月他。
- 註4) 室町時代後期の厨子遺構は63棟を数え、うち三手先とする遺構は20棟、うち禅宗様組物とする遺構は15棟を数える。近世の遺構については全貌が明らかにされているとは考えにくく、その実数についても未だ特定できないと考える。管見の及ぶ桃山時代の組物をもつ厨子の遺構は指定の有無を別にして28棟を数え、うち三手先以上とする遺構は12棟、うち和様三手先とする3棟に対し、禅宗様三手先とする遺構は9棟を確認している。
- 註5) 大法寺観音堂厨子の建立年代については、『国宝・重要文化財建造物目録』（文化庁編集、第一法規出版、平成12年1月）では室・前期とある。また、太田博太郎：『長野県史 美術建築資料編』50頁、大法寺観音堂厨子及び須弥壇の項で棟に鯪をあげていることなどを指摘されて、室町時代後期の建立とされている。また、（註3）大野 敏：中世厨子の形式分類について、日本建築学会論文報告集、第505号、191～198頁、1998年3月では根拠を示してはいないが、室町時代中期に降る可能性を示唆しておられる。
- 註6) 『神奈川県文化財図鑑』建造物編（昭和46年）の「円覚寺仏殿地割図」の項の解説によると、古図の裏書に元龜4年（1573）と作成年が明らかで、永祿6年（1563）焼失仏殿の設計図とされている。
- 註7) 現在、宝塔寺本堂の内陣内、向かって右脇仏壇上に日蓮像を祀る厨子が、左脇仏壇上には後述する日像を祀る厨子が対称的に安置されていて、本論では各々日蓮厨子、日像厨子と呼ぶ。この両厨子の詳細については下記の拙稿に纏めた。
拙稿：宝塔寺本堂厨子の建築について—近世における厨子の建築構成と設計計画について—、近畿大学理工学部研究報告 第38号、161～170頁、平成14年9月。
- 註8) 旧周防国清寺より慶長7年（1602）移築されたものとされている。
- 註9) 厨子は「奉造立十一面大士宮殿一字・・・」と記された棟札が残され江・明和9年（1773）の建立とされ、天保15年（1844）の「宮殿再建」とする棟札は彩色その他の修補をしたものとされている（『笠森寺観音堂修理工事報告書』）。しかし、屋根廻りや彫刻類等には江戸後期頃の様式は認められるものの、特に軸部や組物などは堂と同時期まで遡らせて考えることも可能と考えられ、棟札の造立は大きな修理と考え、本論で取り扱う組物については堂と同時期と考えておく。
- 註10) 定光寺本堂宮殿は「壁板墨書」によって建立年代が明らかとなっているが、尾垂木の形状など少し疑問な点も残されるが、本論ではひとまず明応9年（1500）の建立と考えておく。
- 註11) 善正寺本堂内の向かって右脇仏壇上に安置されていて、豊臣秀次公を祀る。本論では秀次厨子と呼ぶ。この厨子の建築については拙稿に纏めた。拙稿：善正寺本堂内の厨子について （2）、日本建築学会近畿支部研究報告集、497～500頁、昭和52年5月。
- 註12) 長勝寺三尊仏厨子堂は青森県の県指定文化財で、もと旧岩木山百沢寺堂厨子として建立されたものであることが、『重要文化財 岩木山神社本殿外四棟修理工事報告書』に詳しい。

（2006年9月10日原稿受理、2007年2月15日採用決定）